

ゴルゴタの十字架から注がれる命



*今年もまた、灰の水曜日をもって(3月1日)私たちは四旬節に入ります。この40日の間、私たち一人ひとりが、自分の信仰の歩みを振り返り、気を引き締めて、生き方を改めるようにと教会から呼びかけられています。—それは「記念の典礼」である「聖週間」の典礼を相応しい心で迎えるためです。—「聖週間」。イエスのエルサレム入城、最後の晩さん、十字架の上での死、墓の暗闇の上での光なる神の勝利を記念する日々です。—私たちの信仰生活において「聖週間」は非常に大切なひと時であることを新たに自覚しようではありませんか。—



*「聖週間」に向かったの四旬節の日々を皆さんは今年どのように過ごそうと考えておられるでしょうか。もしまだ何も決まっていなかつたら、次のことについて考えてみるようにお勧めしたいと思います。「イエスの十字架に対する自分の理解はどうなっているのでしょうか」と。

＝家庭の事情や仕事上の悩みからくる苦しみ、病気や不幸は「十字架」によくたとえられていますが、イエスの言われる「十字架」がもともとこのようなことを指しているわけではありません。

—長崎の26聖人の時代と違って「十字架」^{こんにち}にかけられる心配のない今日、「十字架」はイエスを証しするに当たって私たちが^{そうぐう}遭遇している無関心、無理解、ぶつかっている困難などを指していると考えた方が適切ではないかと思います。私たちの社会は全くと言っていいほど、イエスとイエスの福音を知らず、知ろうともしていません。この現状の中でイエスを証しすることは「十字架」を背負うことにたとえることができるでしょう。



＝時々、「十字架は神から送られる^{しれん}試練」だ、という言葉を目にするのですが、「人を試すことを楽しんでる意地悪な鬼」神に対してこのようなイメージを抱くことはとんでもない^{あやま}過ちです。

●私たちが信じている神は人を幸せにすることしか考えることができない、いつくしみ深い御父です。

●私たちが信じている父なる神は、我が子イエスを通して、十字架の上で命を捧げるほど、ご自分がどれだけ私たちを愛しておられるかを示された方です。誰よりもまして、父なる神は愛する事の厳しさを体験されている方です。イエスに倣って愛の道を歩もうと思えば私たちも「十字架」を避けて通ることができるはずがありません。

* イエスの生涯しょうがいにおいて、この地上での最後の日は一番長い日になったでしょう。木曜日、日が沈んでからの最後の晩さんをもって始まり、午後3時ゴルゴタの丘の十字架上での死をもって終わった一日。

● イエスのこの一日のおかげで、私たちは人に対する神の計り知れない愛を知ることができました。

● さらに弟子たちの裏切りを始め、多くの苦難に耐え、御父への信頼を貫つらぬいたイエスが、御父によって復活させられたおかげで、私たちは永遠の命へ導かれ、その命に密接に結ばれたことをも知ることができました。—しかし、イエスにとって「貫つらぬく」こと、徹底的に愛することは楽なことではありませんでした。痛みの極きわみを避けては、御父から与えられた使命をイエスは成し遂とげることができませんでした。—

「痛みの伴わない愛は愛ではありません」とマザー・テレサがおっしゃったことがあるようですが、「痛み」、努力の伴わない信仰もイエス・キリストへの信仰ではあり得ません。「わたしについて来たい者は自我を捨て、自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい」と。(マタイ 16、24)

イエスの受難と十字架上での死はお芝居ではありませんでした。イエスは苦しんだふりをしたわけではありません。さらに、イエスは好き好んでこの恐ろしい死を望んだのでもありません。(ゲッセマネの園 マタイ 26・36,46) イエスにとって苦しむことも死ぬことも、目的ではありませんでした。イエスは御父のみ旨むねを優先し、命をかけて、人類を徹底的に愛することを選んだため、人の目から見て、空しく残酷むな ざんぎやくな結末を迎えられました。—しかし、結果的に「復活」のおかげで、イエスの選択は私たちをかけがえのない命へ案内し、私たちに計り知れない喜びをもたらしました。

* イエス・キリストを信じると宣言している私たちは、灰の水曜日から復活祭までの間、日々、このイエスの姿を見つめようと心がければ、それは信じるがために求められる努力、苦勞、厳しく見える選択に挑むことに、手助けになるのではないのでしょうか。

＝共に、再確認しましょう。努力なしには私たち誰一人イエスの弟子として忠実に生きることができません。本気で取り組み、思い切って行動する意志を自分のうちに養い育てようとしなければ、イエスの後について行くことができません。

イエスがおっしゃったように、「天の国は力づくで襲われており、激しく襲うものがそれを奪い取ろうとしている」と。(マタイ 11・12) 言い換えれば「天の国」、イエスが私たちの目の前に展開された世界に入るための努力、神の望んでおられることを行うための努力は、厳しい闘いであるということです。人との闘いではなく、自分との闘いです、自分の代わりに誰も—神も—その闘いに挑むことができません。その闘いのために、「損」に見えるものが確実に生じるのですが、長い目で見れば結果的にその闘いのおかげで私たちもイエスと共に勝利をおさめることができます。

—私たちはどこまでそのことを信じているのでしょうか。—



＝復活祭に向かって「聖週間」を迎えるに当たり、四旬節の間にその問いかけに応えることができるようにもう一度真剣に考えてみようではありませんか。